

〔勢〕の特性 — 漢より唐までの書論を基礎に —

陳 柏 位

はじめに

- 一、外部に現われた迫力性
- 二、有効的な布置の構成性
- 三、上下貫通の序列性
- 四、疾迅流暢の律動性
- 五、〔勢〕の相対性
- 六、〔勢〕の代表—龍を中心におわりに

はじめに

漢より唐までの書論を考察すると、〔象〕、〔形〕、〔力〕が、〔勢〕を生じさせるための基本的な要素であることが明らかとなる〔注〕。〔象〕、〔形〕、〔力〕との関係をまとめてみれば、〔勢〕には四つの特性があるといえる。それは、外部に表われる迫力性、有効的な布置の構成性、上下貫通の序列性、疾迅流暢の律動性である。この四つの特性には、共に相対性が含まれている。すなわち迫力性—内と外、構成性—奇と正、序列性—連と断、律動性—速と遅である。〔勢〕を解く場合には、多様な喩えで表現されることが多い。これらの喩えには、「龍」が最も頻繁に取り上げられている。そこで、「龍」の考察を通して、〔勢〕をとらえてみたい。まずは、迫力性より考察する。

一、外部に現われた迫力性

迫力とは、物体の内部に蓄積された力が外面に表われ出ることを指す。一方の部分が他方の部分を垂直に引く張る力とも言える。迫力は、外部に表われ出る力強さであり、内部に力を備えなければならないものである。すなわち、内力が外を引く張ることが、迫力の基本構造なのである。この基本構造は、〔勢〕と類似する。

〔勢〕には、権威、権力という性質がある。権威、権力は、共に他人を従わせる力を持ち、自らの地位や威力を他者に示すことである。君王は自らの政權や権力を保つために、威力という他者を従わせる〔勢〕を示さなければならぬ。〔勢〕には、自らの力を蓄えてはじめて、他者を治められる働きがある。権力の〔勢〕には、人を威す威力がある。この威力には、他方の力量を引く張って人の心を牽引する作用がある。これは、迫力の意味に通じる。

書論には、書作の素晴らしさや、存在感を表すにあたり、〔勢〕をもって説明する例が見られる。〔象〕と〔勢〕の考察によって、物象の特徴や性質を捉えるために、「若」、「如」、「類」、「似」という模倣の視点と、「俯」、「仰」、「遠」、「近」の多方面の観察角度により、自然現象を象る視点が見られる〔注〕。

この視点によって、多様な自然現象の喩えや比喩が頻繁に用いられる。この多様な喩えには、書の〔勢〕を表すために、龍や虎といった威力を持つ喩えがよく用いられている。この喩えによって、内面的な精力を保たなければ、外面

的な威力が表れない。さらに、雲、霧、雷などの天候状態の喩えをあわせて考えれば、書の〈勢〉の迫力性には神秘的、不可思議的な意味が含まれることになる。稿者は、〈筆力〉を考察して〈力〉と〈勢〉が密接に関わるのは、〈骨〉と〈筋〉であることを明白にした。〈骨〉の剛強堅実と〈筋〉の驚絶勁健は、内面が堅実で整ってはじめて、外面に表出される力量のあらわれとなる。

〈勢〉の迫力性は、内面に堅実な力量が蓄えられてはじめて、外面に表れる〈力〉となる。この〈力〉の性質には、強い震撼力、神秘的で権威を持つ力、目線を奪って従わせる力がある。〈勢〉と〈力〉に関する書論によって、主に〈堅勁〉、〈驚絶〉、〈勁險〉、〈遒勁〉、〈雄強〉、〈屈強〉といった品評語が結び付けられることを論じた。これらの品評語を通せば、〈勢〉の迫力性が明白に理解できる。内面的な力量を蓄えて外面にこの力量を表出し、そして表われた力量には、堅実で圧倒的な威力があるのである。

二、有効な布置の構成性

作品構成とは、いくつかの要素を組み立て一つにまとめることである。すなわち、目的に従って統一的な全体に合成することである。作品構成の目的は、〈勢〉を持つ字形を作り出すことである。漢字は、いくつかの点画によって組み立てられる文字である。書は、漢字の点画字形の組み立てによって、書く者の心情や心境を表わすための行為である。文意を伝えるということ以外に、文字を書くことによって表われた美しさを、自然現象に見える美しさで表現する考えである。書作品を組み立てた漢字の点画字形と、自然現象の形態や様子とを合わせて考えるやり方は、頻繁に見られる。言い換えれば、たとえ書体が変わったとしても、一字の字形、あるいは書作品全体をある種図案とする考え方は、不変である。

〈勢〉に関する書論において、字形や書作品を論じる際に、自然現象の形態

や様子を通し、字形の表情や書作品の均衡の描写が頻繁に見られる。表情と均衡に関する描写には、全体的な構成を重んじる視点がある。この全体的な構成は、主に一字と書作品全体を指す。すなわち、一字や一書作品を一単位として扱うことである。

孫子と孫臆の説では、字形と書作品の構成は兵陣を布置するようにしなければならぬ。兵陣の布置には、「奇」、「正」という相対的な要素が必要である。この相対的な要素は、すなわち相手の態勢や周りの客観的な条件にしたがった上で、判断を下すことである。換言すれば、どんな陣勢を布置するにしても、必ず互いに対応した上で判断しなければならない。この考え方は、点画字形と書作品の構成に影響を与えた。そのため、点画字形、書作品全体の描写は、自然現象の喩えとのかかわりが結び付けられている。

また、相対的な考え方により、存在が独立せず、周りの点画と字形とを合わせる、という考え方が生み出される。〈勢〉と相対的な概念である〈形〉、〈体〉が取り上げられる。〈形〉と〈体〉は、〈勢〉と比べてみれば、具体的に輪郭がはつきりとした静態的な概念であり、熟語として〈形勢〉、〈体勢〉という術語が作り出されたのである。

〈勢〉と〈形〉、〈体〉、そして〈形勢〉、〈体勢〉と結び付けられた品評語から見れば、相互に牽引したり、補充したりする関係を持っていることがわかる。この関係によって、互いに緊密な関係が生じる。そこで、全体的な構成は、一点画より、一字、一書作品として前の点画の状態に従い、次の点画の状態の展開を広めることができるようになる。これは、互いの構成を合わせなければならない。これによって、〈向勢〉、〈背勢〉、〈俯勢〉、〈仰勢〉という点画字形を配置する術語が生み出された。点画字形の互いの関係はさらに緊密になる。この緊密な関係が生じるとともに、互いの存在は有効になり、不整合でまとまらないという状態にはならない。この関係は、磁石で喩えることができる。

点画字形の周りに磁場のような目に見えない働きがあり、この働きで各々の

点画字形は一定の関係を結びつける。相対的な概念である「奇」と「正」、そして磁石の相互に引き合ったり、抵抗したりするという磁場の概念をあわせて、点画、字形、一行、そして書作全体の配置は、すべて有効な配置になる。

それぞれに有効な配置、つながりを構成する〈勢〉は、〈形勢〉、〈体勢〉である。〈形勢〉と関わる言葉の整理を通して、緊密な関係を持つ点画字形の配置を求める意図が見いだされる。緊密な関係をあらわすため、〈体〉を以て表現する。この全体的な概念を表現するため、〈力〉を構成する〈骨〉、〈筋〉、〈肉〉が欠かせない。〈骨〉、〈筋〉、〈肉〉の喩えは、点画字形を有機体として考えるのみならず、さらに整合性を強調するものである。

三、上下貫通の序列性

序列とは、一定の基準に従って順序をつけて並べることである。〈勢〉においての序列は、上下という順序に従うことである。貫通は、貫くことである。上下貫通は、上から下への順序に従って滞らずに貫いて行くことである。これは、書の〈勢〉を論じる際に、重要な要素である。特に書く際に素早さが求められる行書、草書に対して頻繁に取り上げられている。

上下貫通の序列性を論じる上では、主に二点が言える。

(一)、龍、蛇、虫の喩えを用いること。

(二)、「断」という離れて隔たる意味の言葉を用いること。

龍、蛇、虫はみな曲線的な姿を持ち、この姿によって〈勢〉の途切れない連続性を強調する。この連続性は、すなわち貫通である。しかし、点画字形が最初から最後までつながっている様は、連続とは言えない。何故ならば、断ち、離れ、隔たるといふ「断」によって、連続と貫通をさらに強調することができからである。

「断」は、点画字形に実際に書かれていない部分を指すが、点画字形を書く

と共に生じるものである。「断」と「連」を生じさせるのは、筆順である。すべての漢字を組み立てる筆順は決まっていないが、主として上から下へ、左から右へという基本的な流れがある。この基本的な流れがあるので、字形を成す書写順序が次第に生じるわけである。この書写筆順があるからこそ、上下貫通の序列性を生み出す。

上下貫通の序列性には、連続性が含まれる。〈勢〉を解く場合には、連続性を以って説明する説が多く見られる。ところが、単なる連続性だけでは、〈勢〉を説明するには不十分と考える。「断」と筆順の要素を合わせて考えないとならない。「断」と筆順を合わせて見れば、点画字形には、序列が生じる。〈勢〉の連続性は、実は序列性に含まれていると考えられる。序列性がない限り、連続性が生じ得ないし、〈勢〉は表われない。

上下貫通の序列性を代表する〈勢〉は、〈筆勢〉と〈字勢〉である。〈筆勢〉には、前の筆遣いを継承して後の筆遣いを始めさせる作用がある。〈字勢〉には、字形の構成を示す作用がある。〈筆勢〉と〈字勢〉は、それぞれに動態の律動と静態の構成と分かれている。両者の意味には、適当に整ってはじめて、望ましい状態を求める意味がある。この望ましい状態は、すなわち動態の律動と静態の構成を伸長することである。

〈字勢〉の序列性は、〈筆勢〉によって生じるのであり、〈筆勢〉がなければ、〈字勢〉は生じ得ない。したがって、点画字形を成す筆遣いを理解することが必要であり、さらに龍、蛇、虫という曲線的な喩えを用いることから見れば、〈勢〉において上下貫通の序列性を代表するのは、〈象〉と〈形〉である。

四、疾迅流暢の律動性

律動とは、ある動きが流動の中に規則的に繰り返されることである。強弱、遅速などの周期的な進行の変化の構造である。律動には、速度が重要になって

くる。速度とは、単位時間あたりの物の進んでいく速さ、位置の変化である。速度は、筆遣いにおいて重要な要素である。一点画であれ、一字であれ、一書作品であれ、もし筆遣いの速度が変わるとすれば、全体的な雰囲気が一変してしまう。(勢)を論じる際に、速度の表現が重要である。

(勢)に関する速度の説には、主に自然現象の状態と動物の動きの速さとの喩えが多く見られる。速度の速さは抽象的であるので、自然現象の状態と動物の動きを通して説明すれば、速度を連想しやすくなる。(勢)の速度を描写する語は、多様であるが、主に瞬間的に素早い速度を表わすという意味が中心である。ところが、全体的な均衡を求めため、単調の速度の速さは、表現しがたい。一方に傾いて偏らないようにするためには、「緩」や「遅」という概念を入れるべきである。そうすると、速度の進行が遅いという概念が生じ、それと速い速度とを比較すれば、さらに速度の速さを表出できるようになるし、全体的な均衡を取ることができる。

速い速度を中心とする(勢)の表現に、「緩」の速度を入れると、互いに配合する関係が結び付く。「速」と「緩」の組み合わせによって速度の変化が生み出される。この変化は、互いの速度の特徴を表わすのみならず、程好く均衡を取れた場合、滑らかで順調に進んでゆくようになる。緩急遅速という速度によって生じた変化は、(勢)の律動性を生み出す重要なものである。

五、(勢)と相対性

書の(勢)を生み出す要素である(象)、(形)、(力)の考察に、迫力性、構成性、序列性、速度性という四つの特性を取り上げた。この特性には、全て相対性を持つことが見出される。迫力性には、「内」と「外」がある。

(勢)の迫力性は、主に力量のあらわれを中心とするものである。この力量には、自然現象の流水の喩え、生物の強盛な精力の喩え、そして君王の権威と

いう喩えがある。力量の強さを生み出すため、自らの精力や力量を備えなければならず、制度や法則を捉えらると、他人を支配することができる上、自らの威力を強められるようになる。この力量や権威の強さは、「内」である自らの力量が備わってはじめて、生み出されることが明白になる。

『孫子兵法』に流水の喩えがあるが、ただ流水の速さと強さだけでは、説明しきれない。必ず水が石に当たって石が落ちる喩えを用いなければ、流水の強さと速さを表現することができない。生物の強盛な精力を表わすとすれば、互いに強奪して相手の弱さを示すと共に、自らの強さを強調する。君王の権威を表わすとすれば、支配される影響力のない下位の人を並べて比較しなければならぬ。以上の力量の強さを表現する喩えは、他の物や人を並べて比較してはじめて、自らの強さを表わすことができる。すなわち、「内」の強さや存在を表わすために、「外」との比較をしなければならぬ。

構成性には、「奇」と「正」がある。

(勢)の構成性は、主に布置を中心とするものである。この布置には、兵陣の喩え、人間の体形と表情、そして自然現象のあり様などの喩えがある。

兵陣の陣勢を生み出すために、敵の様子や周りの状況という客観的な条件に従った上で、自らにとって有利な布置をしなければならぬ。人間の体形や表情を表わすために、単に一部の部位だけを取り上げるとすれば、体形と表情を表現できず、必ず全部が揃う全体の概念で表現しなければならぬ。この全体の概念を表わすために、各部分の要素を均衡に整えた上で生み出さなければならぬ。

自然現象の有り様を以て構成を表わす場合には、均衡のよく取れた全体的な概念が見出される。兵陣の陣勢、人間の体形と表情、自然現象のありさまの喩えには、互いに調和して均衡をよく取り、まとまった全体を作り出すことが見出される。

序列性には、「連」と「断」がある。

〈勢〉の序列性は、主に連続を中心とするものである。この連続には、龍を中心とする曲線的な喩えがあり、隔たる樹木や井戸という喩えもある。龍の体は、蛇の姿によって描かれるので、〈勢〉を表現する際に、龍や蛇を用いることが頻繁に見られる。

龍で〈勢〉を表した視点は、連続である「連」を説明するものである。龍を表わす場合には、雲や霧で龍の体の一部分を隠すという手法で表現される。この手法は、龍の体が隠れたり、現われたりする表現を生み出すのみならず、さらに龍の曲線的な姿の特徴を強める連続性が得られる。すなわち、局部を隠すことによって、全体の連続を強調するのである。

単に「連」だけで連続性を表わすのでは不足するので、「断」を通して「連」を強調する。この「断」は、隔たる樹木の葉や枝が互い重なる喩え、または遠く離れた井戸の水が互いにつながる喩えによって表現される。

〈勢〉を代表する龍の喩えは、途切れない連続性が逆に断たれることによって、強調されることが分かる。しかし、これは任意に遮断するということなく、必ず上下前後の連なりに従った上で、遮断しなければならぬ。上下前後の連なりに従うという制限がある以上、「連」と「断」は単なる連続性を表わすだけでなく、序列の関係になる。序列の関係は、全体的に連続する条件で、「連」の伸びをさらに広げるために、上下前後という互いのつながりを見極めはじめ「断」を下すのである。言い換えれば、「断」によって「連」を伸び広げることができる。

「断」は、「連」に従って上下前後の状態を合わせた上で生み出されたものである。「連」という連続がない限り、「断」は生じえない。そこで、〈勢〉には連続性がある。しかし、単に連続性を以て〈勢〉を表現することでは足りない。必ず「連」と「断」によって表現しなければならぬ。「断」があれば、上下前後の関係が生み出される。この上下前後の関係を程よく結び付けると、さらに「連」を強調することができる。「連」と「断」は、「連」を続けるため

に「断」を用いるという相対的な関係である。

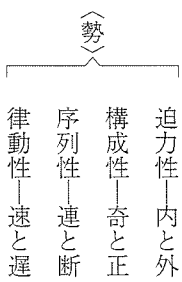
律動性には、「速」と「遅」がある。

〈勢〉の律動性は、主に流暢な速度のあらわれを中心とするものである。この速度には、激水の流れ、鳥の飛ぶ速さ、雷が閃き、雨が激しく降り、石が落ちる様子などの喩えが用いられる。この喩えは、主に激しく素早い速度のあらわれである。素早い速度をさらにどのように表現し、そして全体的な均衡を取るために、「緩」、「遅」という速度の概念が生み出される。

速度は、互いに比較を通して得られた結果である。すなわち、単なる速さのみであれば、速度の均一化になってしまい、速さを感じることができなくなる。必ず相対的な「遅」、「緩」を比べて比較することで、速度の差を表わすことができる。

異なる速度の差の組み合わせによって、速度の多様さが生じ、さらに全体的な均衡を求めた全体的な速度のあらわれが律動的な変化に向かって展開する。その上で、書作品には、流暢さが生み出される。〈勢〉には、流暢、連続という性質がある。しかし、流暢と連続だけで〈勢〉を説明するのは不足である。流暢と連続を一括するのは、律動である。律動がなければ、流暢、連続は生み出されない。

律動には「緩」、「急」、「遅」、「速」という速度の差が重要である。この差によって生じた変化に富み、互いのつながり続ける周期的な進行が生み出される。この周期的な進行を生み出すのは、「速」と「遅」である。したがって、〈勢〉の特性である迫力性、構成性、序列性、律動性は、以下のようなつながりを結び付けることができる。



「内」と「外」、「奇」と「正」、「連」と「断」、「速」と「遅」は、相対的な性質を持つ概念である。これらの概念は、釣り合いを保ち、牽引をはじめ成り立つのである。これは、単独で何物にも拘束されないという絶対的な考えではない。したがって迫力性、構成性、序列性、律動性は、二つの相対的な概念によって合わせたり、引つ張ったりすることによって、程よく均衡を取って生み出されるものであり、決して単独で何物にも頼らずに生み出されるわけではないことがわかる。〈勢〉は、相対的な性質を持つのである。

六、〈勢〉の代表―龍を中心に

龍は中国の五行では東の方位に属するもので、青龍といい、四季の春を代表する。龍は、白虎、朱雀、玄武と並んで四象と呼ばれ、鳳凰、麒麟、亀と一緒に四瑞獣と称される。

龍の生成についてはさまざまな説がある。螺旋的な雲の形より生み出された説、細長く曲がりくねる雷の様子より生じた説、松の根が曲がりくねる形態によって創造された説がある。これらの説は、主に曲りくねる形態を持つ点が共通である。後漢の王充『論衡』には、龍についての最も古い記述が確認できる^{〔注3〕}。辰と巳は、十二支であり、辰と巳の順番に従って龍と蛇の位置を配置することから、蛇は小龍とも呼ばれる。龍の様子について、『論衡』、『説文解字』、『爾雅』、『広雅』には次のような説明の文が見られる。

◆『論衡』

龍の像は、馬の首、蛇の尾なり。

(龍之像、馬首蛇尾。)

◆『爾雅』

馬八尺を、駮と為す。
(馬八尺為駮。)

◆『説文解字』

龍は、鱗虫の長、能く幽能く明、能く細能く巨、能く短能く長にして、春分天に登り、秋分に淵に潜る。

(龍、鱗虫之長、能幽能明、能細能巨、能短能長、春分而登天、秋分而潜淵。)

◆『広雅』

鱗が有るを蛟龍と曰い、翼が有るを応龍と曰い、角が有るを虬龍と曰い、角が無きを螭龍と曰い、未だ天に升らざるを蟠龍と曰う。

(有鱗曰蛟龍、有翼曰應龍、有角曰虬龍、無角曰螭龍、未升天曰蟠龍。)

『論衡』、『爾雅』、『説文解字』は、龍の具体的な様子を説明する文である。馬の首、蛇の尾、長細く体が自由に伸長する特徴を持つことがわかる。『広雅』は、鱗、翼、角の有無、そして天に昇るかという基準によって、龍の種類を「蛟龍」、「応龍」、「虬龍」、「螭龍」、「蟠龍」に分ける説明である。

衛恒『四体書勢』、王珉『行書状』、唐太宗『王羲之伝論』には、書の美しさを龍で表現する文が見られる。『行書状』、『王羲之伝論』と梁武帝『草書状』には、「蛟龍」で書の〈勢〉を表現する文があり、『六体書論』と『書断』中には「蛟龍」が見られる。「蟠龍」は、春秋戦国時代の青銅器に飾られた一つの図案である。この図案には、巻いてわだかまるような特徴がある。蟠龍は天に昇らない龍であるので、前に取り上げた性質と書の〈勢〉を表現する文とをあわせて考えてみると、この〈勢〉は曲線的な渦巻きをしている様子であると推測する。

龍の様子については、前述した『論衡』と『爾雅』の説があり、さらに詳し

い描写がある。現在の具体的な龍の姿のイメージは、『爾雅翼』によって創造されたものであると考えられる^(註4)。龍の様子を描写する文を通して、龍は天と地に通じ、春分に登って秋分に淵に潜る、九つの動物の特徴を持つ神秘的な動物である。龍は、書の美しさを表現する時に使われている多くの例があり、特に〈勢〉と結び付ける文が以下の如く多く見られる。

◆西晋 衛恒 『四体書勢』「隸勢」

遠くより之を望めば、飛龍の天に在るが若し。

(遠而望之、若飛龍在天。)

◆東晋 王珣 『行書狀』

字体を詳覧し、筆蹟を究尋す。絜たり偉たり、珪の如く璧の如し。宛は蟠螭の勢を仰ぐが若く、翼は翔鷹の翻を舒ぶるが若し。

(詳覧字体、究尋筆蹟。絜乎偉乎、如珪如璧。宛若蟠螭之仰勢、翼若翔鷹之舒翻。)

◆南朝梁 袁昂 『古今書評』

蕭思話の書、走墨は連綿たり、字勢は屈強たり。龍の天門に跳り、虎の鳳闕に臥するが若し。

(蕭思話書、走墨連綿、字勢屈強。若龍跳天門、虎臥鳳闕。)

◆唐 張懷瓘 『書議』

草と真に異れる有り、龍虎は神を威し、飛動は勢を増す。

(草与真有異、龍虎威神、飛動増勢。)

◆唐 張懷瓘 『書斷』上「八分」

龍騰り虎踞り、勢は一に非ず。
(龍騰虎踞兮、勢非一。)

◆唐 張懷瓘 『書斷』中

張芝は、清澗の長源、流れて限り無く、峴谷を縈廻して、造化に任ずるが若し。蛟龍駭獸、奔騰拏攫の勢に至りては、心手変に随い、窈冥にして其の如く所を知らず。是を達節と謂うなり。

(張芝 若清澗長源、流而無限。縈廻峴谷任於造化。至於蛟龍駭獸、奔騰拏攫之勢、心手隨變、窈冥而不知其所如。是謂達節也。)

歐陽詢は、龍蛇戰鬪の象、雲霧輕濃の勢有り。

(歐陽詢 有龍蛇戰鬪之象、雲霧輕濃之勢。)

◆唐 張懷瓘 『文字論』

跡は塵壤に在りと雖も、而れど志は雲霄に出づ。靈変常無く、飛動に務むるは、或いは虎豹を擒にするに、強梁拏攫の形有り、蛟螭を執うるに螭螻盤旋の勢を見るが若し。

(雖跡在塵壤、而志出雲霄、靈変無常、務於飛動。或若擒虎豹、有強梁拏攫之形、執蛟螭、見螭螻盤旋之勢。)

◆唐 張懷瓘 『六体書論』「隸書」

王獻之、遠く父の鋒芒に減じ、往往にして直筆するのみ。鋒芒は、犀象の牙角有るが若し。婉態は、蛟龍の盤遊姿あるが若し。

(王獻之遠減於父鋒芒、往往直筆而已。鋒芒者、若犀象之有牙角。婉態者、若蛟龍之姿盤遊。)

◆唐 李嗣真 『書後品』

歐陽の草書、与に競爽し難し。旱蛟の水を得、饒兔の穴に走るが如く、筆勢、少なきを恨む。鐫勒及び飛白諸勢に至りては、武庫の矛戟、雄劍の森森たるが如し。

(歐陽草書、難与競爽。如旱蛟得水、饒兔走穴、筆勢恨少。至於鐫勒及飛白諸勢、如武庫矛戟、雄劍森森。)

謝公は縦任自在、螭盤り虎踞えるの勢有り。

(謝公縦任自在、有螭盤虎踞之勢)

◆唐 竇泉 『述書賦』上

呉は則ち広陵の休明〔皇象〕あり。朴質にして古情あり、以て真を窮め難く、学んで成すべきに非ず。龍螭の蟄啓し、伸盤して復た行くに似たり。

(呉則広陵休明。朴質古情、難以窮真、非可学成。似龍螭蟄啓、伸盤復行。)

思〔孔侃、字は敬思〕の行は、則ち軽利峭峻にして、驚虬、逸駿に類す。

(思行則軽利峭峻、類驚虬逸駿。)

「蛟龍」、「螭龍」、「蟠龍」は、〈勢〉を表現する際によく使われている喩えである。この喩えによつて、「宛」、「盤」、「旋」の曲線的な動きの印象が呼び起こされる。「蚘蟻」という蛟龍が曲りくねった様子を表す語意を合わせてみれば、書の〈勢〉には、曲線的な形態がある。この形態は、つまり点画字形の曲がる部分を指す。龍や蛇など曲線的な様子を持つ喩えによつて点画字形の曲がる部分を表現するようになる。この喩えには、「宛」、「鉤連」、「蟠」、「盤曲」が頻繁に見られる。

例文をみれば、龍が動いているような様子を描写していることがわかる。こ

の描写には、「飛」、「動」、「跳」、「奔騰」のような極めて生動感が溢れる動詞が見られる。生動感の中に、躍動、敏捷、力強いという表現が感じられる。生動感は、〈勢〉を論じる際に重要である。この生動感には、龍と蛇を用いるのみならず、さらに天候の状態によつて表現されるものもある。加えて「虎」、「豹」、「駭獸」という力強さを持つ動物の喩えをあわせて用いるので、生動感の中には迫力、威圧が含まれると考えられる。

以上のように、書の美しさを表わす文には、龍の喩えが頻繁に使われており、龍によつて〈勢〉を表現する上では、次の三点があると言えらる。

(一)、龍は神聖的、権威的な象徴を持つ神獸であり、畏怖の念を持ち、直視できず捉えることはできないと想像される。龍の喩えによつて書の〈勢〉は予測が付かず、人の心を震撼させる働きを持つ。

(二)、龍の〈勢〉には、曲線的な特徴がある。これは、龍の姿の印象によつて生み出されたものである。この特徴には、曲がりくねって連続的なつながりを結び付ける性質がある。この性質は、雲や霧や水などの流れと類似する。曲線的な特徴を持つことで、直線より視覚上の導きを豊かにすることができる。この導きに沿つて、目線を引くことができ、単調な直線に比べて味わい深くなる。

(三)、龍の〈勢〉には、生動感がある。この生動感には躍動的、活動的なあらわれがある。この躍動的、活動的なあらわれを表現するために、「虎」、「豹」、「蛇」、「獸」などの動物の喩えを用いることがある。この喩えは、みな意気が盛んで勇ましい性質がある。

おわりに

以上〈勢〉に関わる特性をまとめると、主に二つに絞ることができる。

(一)、雄性的

(二) 神秘的

雄性とは、雄としての性質であり、雄々しく勇ましい意味を持つ。雄性的表現には、権威、威力、迫力、雄壮、勇猛、精力といった性質が含まれる。権威、威力、迫力は、兵法家の〈勢〉によって生じたものである。権威、威力、迫力は、法則に従って自らの権力を強化することによって他人を支配して服従させる意味である。すなわち、他者を圧倒するような力強さであり、氣勢、勢力である。

〈勢〉には、自らの強盛的な力量を持つて征服する意味がある。この意味は、よく動物の競争によって表現されている。他者を圧倒し服従させるために、他者よりもっと精力を持たなければならぬ。この意味には、男性、または動植物の雄の意味が含まれると考えられる。なお、〈勢〉に関する喩えの意味を加えた上で、〈勢〉は雄性的表現を中心とする概念が明らかになる。

神秘とは、人間の知恵では計り知れなく想像できないこと、普段の認識や理論を越えることである。神秘的表現には、不可思議、かつ捉えにくく、説明のつかない意味がある。これらの意味があるこそ、神秘は、極めて奥深く、隠された秘密があるような表現を用いることになる。この奥深く捉えにくい意味が含まれるので、書論において〈取勢〉という〈勢〉を取る用語が作り出される。

〈勢〉には、序列性と律動性がある。龍の喩えを合わせると、曲線的なあらわれは、〈勢〉の神秘的な表現を生み出すことに対して重要である。曲線的なあらわれがあるこそ、途切れず連続し続けるような印象が呼び起こされるのである。

「連」と「断」、「速」と「遅」の要素を含めた上で、書作を味わう際にこの曲線的なあらわれに導かれ、視覚的な流れが自然に生み出される。この視覚的な流れが生み出されると共に、生き生きとした表現が生じる。加えて、風格、なりゆきも生じる。虎、豹、雲、霧(霧)といった自然現象の喩えを合わせて

考えれば、〈勢〉は神秘的表現を中心とする概念が明らかになる。

【注】

(注1) 〈象〉、〈形〉、〈力〉と〈勢〉との関わりは、『勢 効力の歴史—中国文化横断—』フランソワ・ジュリアン著、中島隆博訳(知泉書館、二〇〇四年)と、『因動成勢』涂光社著(『中国美学範疇叢書之五』、百花洲文芸出版社、二〇〇一年)という二冊の先行研究を基礎として取り上げられた。〈勢〉と、他ジャンルとの関係は、以下の拙稿を参照されたい。

(1)、「〈勢〉—蔡邕、衛夫人、王羲之の用筆論—」『書道学論集』七、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、二〇一〇年)

(2)、「静態の〈形〉と動態の〈勢〉—漢代から唐代までの中国書論を中心に—」『書道学論集』八、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、二〇一二年)

(3)、「筆勢の美—運筆速度の緩急遅速を中心に—魏晋から唐までの書論—」『書道学論集』九、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、二〇一二年)

(4)、「筆力の構築—〈骨〉〈筋〉〈肉〉の概念より—漢魏晋六朝の書論を中心に—」『書学書道史研究』二十三、書学書道史学会、二〇一三年)

(注2) 『四体書勢』をはじめとして魏晋南朝の書論には、書の美しさを表わすために、自然現象の喩えを以って解く視点が多く見られる。この視点には、「若」、「如」、「類」、「似」と「俯」、「仰」、「遠」、「近」がある。

(注3) 『論衡』「言毒篇」に、「辰は龍と為り、巳は蛇と為す。辰、巳の位は東南に在り。(辰為龍、巳為蛇。辰、巳之位在東南。)」とある。

(注4) 『爾雅翼』に、「龍は鱗虫の長。王符は、其の形が九似有りと言う。頭

は駝に似、角は鹿に似、眼は兔に似、耳は牛に似、項は蛇に似、腹は蟹に似、鱗は鯉に似、爪は鷹に似、掌は虎に似、是れなり。其の背に八十一鱗有り、九九の陽数を具う。其の声は銅盤を夏つが如し。口の旁に須髯有り、頷の下に明珠有り、喉の下に逆鱗有り。（龍者鱗虫之長。王符言其形有九似。頭似駝、角似鹿、眼似兔、耳似牛、項似蛇、腹似蟹、鱗似鯉、爪似鷹、掌似虎、是也。其背有八十一鱗、具九九陽数。其声如夏銅盤。口旁有須髯、頷下有明珠、喉下有逆鱗。）とある。

『爾雅翼』は、漢代の字書である『爾雅』を補足する辞典で、南宋の羅願の著である。「翼」というのは、『易』の十種類の古い注釈を「十翼」と言うように、本体を援げて空に飛ぶ意を示す。同書は、草、木、鳥、獸、蟲、魚に分類を行い、龍の情報は、卷二十八「釈魚一」に記載されている。

(注5) 『管子』形勢篇には、「蛟龍は水を得て而して神立つべきなり。虎豹は幽に托して而して威載るべきなり。（蛟龍得水、而神可立也。虎豹托幽、而威可載也。）」とある。蛟龍は水を得るから、水に潜り飛び出すことよって神秘が生じる。虎豹は幽遠に隠れ、奥深くて測りがたい場所に居り威厳が生じるわけである。水、雲、霧は、龍と（勢）とともに用いられる喩えである。雲、霧は流動性を持つほか、隠れてしつかり捉えられない意味をも持つ。